〔気品の泉源、智徳の模範〕

福澤諭吉

青空文庫

左の一編は十一月一日、慶應義塾先進の故老生が懐旧会とて芝紅葉館に集会のとき、福澤先生の演説したるものなり。

老生の演べんとする所は、慶應義塾の由来に就き、言少しく自負に似て俗に云う手前味噌の嫌なきに非ざれども、事実は座中諸君の記憶に存する通り聊も違うことなく、且つ今夕は内輪の会合にして他に憚る所もあらざれば、過ぎし昔の物語も吾々には自から一入の興味あるべし。抑も人間世界は苦中楽あり。今を去ること三十年、我党の士が府下鉄砲洲の奥平藩邸を去て芝新銭座に移り、匆々一小塾舎を経営して洋学に従事したるその時は、王政維新の戦争最中、天下復た文を語る者なし。況んや洋学に於てをや。時論は攘夷の頂上に達し、洋学者の如きは所謂悪魔外道の一種にして、世間に容れられざるのみか、又随てその悪む所と為り、時としては身辺の危険さえ恐ろしき程の次第なりしかども、人生の性質は至極剛情なるものにて、世人が概して自分等を敵視すれば、その敵意の盛なる程に此方も亦窃に之に敵するの心を生じて、公然力を以てするは固より叶わざる所なれども、心の底には他の無識無謀を冷笑すると共に、故さらに勉めてその言わざる所を言い、その好まざる所を行い、一切の言行を世論の反対に差向けて意気劇烈、些少も仮す所なく、満天下を敵にするの覚悟を以て自から居たるこそ一時の奇なれ。蓋し我党は夙に西洋文明の真実無妄なるを知り、人間の居家処世より立国の大事に至るまで、文明の大義を捨てゝ他に拠るべきものなきを信じて、世の俗論、古論、保守論を悦ばざることなれども、その文明論の極端を公言して人心を激したるは、亦是れ人生の獣勇、闘争を好むの情に出たることならんと、今より回想して自から悟る所なり。然りと雖もこの獣勇、決して無益ならず。当時我党の士は天下の俗論古論者に敵すると同時に、一方には彼等を網羅して之を諭し、その古来徹骨の蒙を啓て我主義に同化せしめんとの本願なれば、四面暗黒の世の中に独り文明の炬火を点じて方向を示し、百難を冒して唯前進するのみ。兵馬騒擾の前後に、旧幕府の洋学校は無論、他の私塾家塾も疾く既に廃して跡を留めず、新政府の学事も容易に興るべきに非ず、苟も洋学と云えば日本国中唯一処の慶應義塾、即ち東京の新銭座塾あるのみ。世人は之を目して孤立と云うも、我れは自負して独立と称し、在昔欧洲にてナポレオンの大変乱に荷蘭国の滅亡したるとき、日本長崎の出嶋には尚おその国旗を飜して一日も地に下したることなきゆえ、荷蘭は日本の庇蔭に依り、建国以来曾て国脈を断絶したることなしとて、今に至るまで蘭人の記憶に存すとの談あり。同志の士は是等の故事を物語りして、我慶應義塾は荷蘭の国旗を飜したる出嶋に異ならず、日本の学脈を維持するものなりと、敢て自からその任に当りて、ます〳〵新知識の輸入に怠らざる中にも、従前徳川時代の洋学は医術を始めとして、化学、窮理、砲術等、多くは物理器械学の辺を専らにしたるものを、慶應義塾は一歩を進めて世界の地理、歴史、法律、政治、人事の組織より経済、脩身、哲学等の書を求めてその講読に着手し、現に英語に云うポリチカル・エコノミーを経済と訳し、モラル・サイヤンスを訳して脩身学の名を下したるも慶應義塾の立案なり。その他英語のスピーチュに演説の訳字を下して会議演説の趣意を説き、あらゆる反対論を排して今日世間に普通なる彼の演説法を教えたるも義塾にして、スチームを汽と訳し、コピライトを版権と訳したるも義塾の発意なり。凡そ是等を計れば枚挙に遑あらず。同志結合、力のあらん

限りを尽して文明の一方に向い、一切万事その旧を棄てゝ新是れ謀り、以て日本全社会の根底より面目を改めんと試みたるその企望は、実際に於て固より微力の及ぶべき限りに非ず、唯是れ一時の空想に似たりしかども、爰に驚くべきは我日本国民の資質剛毅にして頑ならず、常にその固有の気力を保つと同時に、慧眼能く利害の在る所を察して、王政の一新と共に民心も亦一新し、文明の進歩駸々として我党の空想を実にしたるのみか、却てその空想者の思い到らざる所にまで達して、遂に明治の新日本を出現したるこそ不思議の変化なれ、望外の仕合なれ。前後の事情を回想すれば感極まりて唯涙あるのみ。畢竟時運の然らしむる所なりと云うも、素因なくして結果はあるべからず。吾々は今日に居て只管先人の余徳その遺伝の賜を拝する者なり。左れば我党の士が旧幕府の時代、即ち彼の鉄砲洲の塾より新銭座の塾に又今の三田に移りし後に至るまでも、勉強辛苦は誠に辛苦なりしかども、首を回らして世上を窺い、文明の風光次第に明にして次第に佳境に入るを見るは、畢生の大快楽事にして譬えんに物なし。苦中楽ありとは即是れなり。然りと雖も人生の多情多慾なる、殆んど飽くことを知らず。今日の慶應義塾を見るに、その学事は凡そ資金の許す限りに勉めざるはなし。否な、世間普通の官私諸学校に比すれば資力以外の事にまで着手して見るべきものありと雖も、天下の時勢、尚お未だ独立の学校事業に可ならずして、経済の不如意と共に学事も亦不如意の歎を免かれず。又教場の学事は殆んど器械的の仕事にして、僅に銭あれば以て意の如くすべしと雖も、我党の士に於て特に重んずる所は人生の気品に在り。抑も気品とは英語にあるカラクトルの意味にして、人の気品の如何は尋常一様の徳論に喋々する善悪邪正など云う簡単なる標準を以て律すべからず。況んや法律の如きに於てをや。固よりその制裁の及ぶべき限りに非ず。恰も孟子の云いし浩然の気に等しく、之を説明すること甚だ難しと雖も、人にして苟もその気風品格の高尚なるものあるに非ざれば、才智伎倆の如何に拘わらず、君子として世に立つべからざるの事実は、社会一般の首肯する所なり。幸にして我慶應義塾はこの辺に於て聊か他に異なる所のものを存して、鉄砲洲以来今日に至るまで固有の気品を維持して、凡俗卑屈の譏を免かれたることなれども、元来無形の談にして、口以て言うべからず、指以て示すべからず、仏者の語を借用すれば以心伝心の微妙、義塾を一団体とすればその団体中に充満する空気とも称すべきものにして、畢竟するに先進後進相接して無形の間に伝播する感化に外ならず。然るに今老生は申すまでもなく、座中の諸君も頭髪漸く白し。況んや老少不常にして、先年既に小幡仁三郎、藤野善蔵、蘆野巻蔵、村尾真一、小谷忍、馬場辰猪等の諸氏を喪い、又近年に至りては藤田茂吉、藤本寿吉、和田義郎、小泉信吉、野本貞次郎、中村貞吉、吉川泰次郎氏等の不幸を見たり。蓋し人の死するは薪の尽るが如く、その死後の余徳は火の尽きざるが如しと云うと雖も、薪と火と共に消滅するの虞なきに非ず。従前既に幾多の名士を喪い、今又老生と諸君と共に老却したり。自然の約束に従て次第に世を去りたらば、跡に遺る壮年輩を如何すべきや。壮年の活潑、能く吾々長老の遺志を継ぐべしと信ずれども、全体の気品を維持して固有の面目を全うせしむるの一事は、特に吾々先輩の責任にして、死に至るまで之を勤るも尚お足らざるを恐るゝ所のものなり。吾々の生前果して能くこの責任を尽し了りて、第二世の長老を見るべきや否や。之を思えば今日進歩の快楽中、亦自から無限の苦痛あり。老生の本意はこの

慶應義塾を単に一処の学塾として甘んずるを得ず。その目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を実際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言うのみに非ず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを期する者なれば、今日この席の好機会に恰も遺言の如くにして之を諸君に嘱托するものなり。

青空文庫情報

底本：「福澤諭吉著作集　第5巻　学問之独立　慶應義塾之記」慶應義塾大学出版会
　　2002（平成14）年11月15日初版第1刷発行
底本の親本：「時事新報」
　　1896（明治29）年11月3日
初出：「時事新報」
　　1896（明治29）年11月3日
※【　】内の編者による解説は省略しました。
※底本の編者による語注は省略しました。
※初出時の表題は「演説大意」です。
※〔〕付きの表題は、底本編集時に与えられたものです。
入力：田中哲郎
校正：hitsuji
2019年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

〔気品の泉源、智徳の模範〕

福澤諭吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/